

震災大日本
復興支援活動

思い出の写真を修復 武蔵野大生が一枚一枚丁寧に

東北教区災害ボランティアセンター（仙台、ビ、バクテリアが付着別院内）を拠点に、多くのボランティアが東日本大震災の被災地復興と被災者支援の活動を行っている。

宗門関係の武蔵野大（寺崎修学長、西東京市）は夏休み中の5週間、ボランティアの職員を5班に分けて派遣。それぞれ7泊8日の行程で同センターを拠点に、甚大な津波被害に遭った宮城県石巻市・称法寺（細川雅美住職）や石巻市役所などで作業を行った。

同市役所では、瓦礫や倒壊した家屋などから見つかった写真の保存・修復のための複写・洗浄作業を行った。



紙やランドセル、衣服など様々な私物が保管されており、連日多く市民が思い出の品や遺品などを捜しに訪れている。

8月28日から参加した高寺南青さん、山田暢子さん、山口仁美さん（いずれも2年）は「大きな力になれなくても気持ちで支えた」と募集を見てすぐに応募。「刷毛で触れただけで写真の表面がはがれ落ちてしまった時は、その人の思い出を消してしまったように思ってしまった。」

また、仏教壮年会連盟は三嶋統吾理事長や役員など5人が8月17日から3日間、同センターを拠点に支援活動。称法寺では墓地を埋め尽くしていた流入物の撤去と草取り、仙台市宮城野区の専能寺では足利一之任職や仏社会員から被災状況を聞いた。また、同センターを訪れていた福島県浪江町・常福寺の廣畑恵順住職から、原発の被害状況や20㌔圏内の警戒区域にあるために門徒が離散し、寺院活動が行えない実態などを聞いた。

同センターは東日本大震災後の3月17日に開設。各地の僧侶や門信徒、宗門関係学校の学生・生徒のほか、一般の人や地域住民など様々な人が参画。同別院内の旧あそか幼稚園の園舎を宿泊施設として、大型連休や夏休みには長期利用する家族連れやグループ、本山をはじめ各教区教務所からボランティアとして8月末までに1298人が登録。延べ6027人が被災地での瓦礫や流入物の撤去や避難所での炊き出し、支援物資の仕分け・搬入作業のほか、被災者の心のケアなどにあたった。

でつらい気持ちになった。今、被災した人は、楽しかった過去を振り返るのはつらいかもしれないが、いつか笑顔で手に取れるように写真を残したい」と話していた。同市ボランティアの上川幸夫さんは「地域のボランティアは縮小傾向にあり、多人数で長期間安定的に作業していただき大変助かった」と感謝していた。

同大学のボランティアには定員を上回る応募が寄せられた。実施に先立ち、同センターから活動経験者を招き、参加者対象の説明会を開催。期間中、学